

三十世 宏雲妙顥禅尼こううんみょうえいぜんにの葬儀にあたり檀家総代だんかそうだいとして一言お別れの言葉を述べさせていただきます。

故西垣穎子様にしがきえいこと初めてお会いしたのは御巢鷹山おすたかやまで

日航機墜落事故があつた昭和60年（1985年）だと記憶しております。

その頃、寺は長きに渡り住職を務められました

二十八世 円晃隆満えんこうりゅうまん大和尚が御健在で住職を務めておられました。

昭和六十二年十一月隆満和尚りゅうまんが逝去せいきよされ影地先生かげじが、その夫婦とも温厚な性格を二八世から評価されたのでしよう、二十九世天通影地大和尚てんつうえいじだいおしょうとして跡を託されました。

しかし、晋山よりわずか老年半いちで急逝きゅうせいされました。

そのあとを、当時、三菱商事でコンピュータの導入たずさに携たわつた宰朋さんただともの仕事の区切りがつくまでと、穎子様えいこが三十世 宏雲妙顥禅尼こううんみょうえいぜんにとして住職の役につきました。

妙顥禅尼みょうえいぜんには、天性の明るさと、人に好かれる性格を、ここで大いに発揮され、上田老師など豊川稲荷の僧侶たちの協力など多くの人の助けを得て順調に寺院の運営を果たされました。

その中で特に記憶に残っているのは平野老師を迎えての月一回の坐禅会を始めたことで、私は仏教とは、と初めて感じられる体験をさせていただきました。

約束の一〇年間に過ぎ、平成一〇年十二月、後あとを現東堂の宰朋さいほう和尚に任せると、ご自分は自由気ままに生きたいと、ニッセイが運営する松戸の介護付き老人ホームにさつさと隠棲いんせいされてしまいました。

それからは私達の目の前に姿を見せることもなく、時々娘さんと旅行するなどして、余生を楽しんだと聴いておられます。

現在の東陽寺の興隆は宰朋さいほう和尚の才覚さいかくに負うところが大きであります、その人脈と基盤つきを造られた妙顥みょうえい禅尼ぜんにの功績は、中興の祖といわれる、二十四世円晃えんこう隆満りゅうまん大和尚の功績に匹敵すると私は考えております。

この度の訃報に接し、まさに九五年の歳月まいづきを楽しく全うしたという思いを持ちました。

宏雲こううん妙顥みょうえい禅尼ぜんに

本当にありがとうございました。

安らかにお眠りください。